
サチ子の日記

土堀 友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サチ子の日記

【Nコード】

N5035S

【作者名】

土堀 友

【あらすじ】

静男は義妹と浮気しようとする。

おはるちゃん1

静男は春代と夜空を見上げていた。

「ほら、流星群よ。見えるかしら」

春代は夜空を指差して、興奮したように話し掛ける。静男は寄り添いながら、

「美しか。星が降る、まさに星が降っているときいいようがない」

と、その指さす方角を見つめた。北東天の一角であった。

「ペルセウス座流星群っていうのよ。お盆の時期に観ることができ」

「おはるちゃんは星のこと、詳しいね」

「それほどでもないけど」

春代は、お星様はいつも観ているの、願^がかけしているから、と言つて両手を合わせた。去年の八月のことである。

深夜零時を回ってもふたりは夜空を眺めていた。

年も改まり正月の二日目、静男は一人でこたつに入っていた。

暮れから正月にかけて到来した寒波。山から吹き下ろす風は冷たく、その寒さはやはり骨身にこたえる。

妻の秋子と三歳になる息子は、電車で三十分ほど離れた妻の実家に帰っており、静男が常々狭いと感じていた六畳の居間も、こうして一人つきりで居ると意外と広く見える。実に寒々として、わびしいものである。

静男は新しい作品の構想を練っていたが、どうも落ち着かず、以前書き溜めておいた自分の作品に目をやっていた。短編小説風に書いたものを、ある程度まとめて、全集という形で世に送り出せないものかなどと、大雑把であるが、そんなことを考えていた。

静男は小説家であるが、その仕事ぶりは芳^{かんば}しくなく、収入は細く、

生活は苦しかった。

それに引き換え、静男の実家は代々続く漁師の網元で、船もたくさん持つている資産家である。父母は高齢であり、歳の離れた長兄、作蔵が上柳の家督を相続していた。

おはるちゃん2

静男は独身時代から生活の全てを実家に依存しており、その癖は結婚した今でも少しも変わっていない。秋子にはそれが不満であった。静男の実家には、ほとんど顔を出さず、自分の実家に帰っては静男の不甲斐なさを嘆いている。

元々静男にはサチ子という恋人がいたが、秋子と三角関係になり、ふとしたはずみに過ちを犯した秋子は、静男の子を身籠った。サチ子は静男の元を去り、戦いに勝利した秋子は静男と結婚したのである。

秋子は理知的で、勝気な性格である。学生時代は静男の才能に惚れこみ、いつかは有名な作家になると信じていたが、時が経つにつれてその期待は裏切られ、現実には抜き差しならない状況になっていた。

他人に自慢のできる夫、私は作家夫人よ。そのようなブランドを手に入れるという夢が破れ、静男に対する愛情も急速に薄れていった。

山の手にある秋子の実家には、母と妹の春代が暮らしていた。何かと口実を付けて実家に帰る秋子に、母は「しっかり嫁勤めしなさい」と小言をいつてはいるが、内心秋子が帰ってくることを、心楽しみにしている。

その反面、静男の家では秋子が実家に帰るたびに、入れ替わるように、妹の春代が遊びに来ていた。

空はどんよりとして雨雲が立ちこめ、昼というのに夕暮れのような暗さである。

静男はぼんやりと、窓から外の景色を眺めていた。

お昼も過ぎた。いつもならもう来るころだが

柱時計に目をやると、人の気配がして玄関の開く音が聞こえた。

「おめでとうございます。静男しずお義兄さん、居ますか？」

春代の明るい声が響いた。彼女は玄関先でコートを脱ぐと、そのまま居間にあがってきた。フリルのついた白いブラウスの上に、オレンジ色のカーディガンを羽織った清楚な装いである。

おはるちゃん3

静男はウロウロと落ち着かず、立ったり座ったりしていた。玄関まで出迎えることは、いかにも「お待ちしていました」と言わんばかりで、いささか照れくさかったのである。

ぶっきらぼうに、おめでとう、と言った。

春代はニコツと笑ってこたつに入ってきた。

「静男さんは、うお座ですね。私調べたの」

「星占いですか。それで、どうでした？」

「何でもないです。秘密ですよ」

春代は意味ありげな笑みを浮かべ、ミカンの皮を剥き始めた。静男は腹が減って何か食べたいと思った。

「あ　そうだ、おはるちゃん。正月だから一杯やりたいね」

「そうね、まっいいか。一本だけですよ」

春代は慣れた手つきで冷蔵庫からおせちの詰まったお重を取り出し、こたつの上に手際よく並べた。料理の苦手な秋子の代役で、何度も上柳の台所に立った春代には、どこに何があるかは、おおよそ見当がついていた。

「ハイ、おひとつどうぞ」

電子レンジで爛かんをつけた徳利の首をつまんで、静男の横に座った。酒は恋の媚薬である。その匂いは甘く強い。女の香りはその裏に隠れるのであった。

「辛口のお酒はアツアツでないとダメよ。」

それに盃はかすはいっばいグイ飲みでしょ。

これは満杯みんぱいにしてはだめね。

半分ぐらい注いで冷めないうちに一気に飲み干しますの。
ぐいっとね、わかります？」

春代は姉さん女房を気取って、七分目ほど酒を注いだ。

「あ　旨い、おはるちゃんのお酌で、よけいうまいよ」

酒を飲み干す静男の喉元が、グビッと鳴った。

「おはるちゃんも一杯いこう」

「エ、ダメヨ。でも、一杯だけならいただこうかしら」

春代は半分ほど注がれた盃を、二度に分けて飲み干した。

「ほう、なかなかいけるね」

「うふふ。はい、お返しします」

「はいはい、どうもどうも。さて、どれがいいかな。黒豆でもつまむかね。それともエビ、いやいや牛肉の巻いたのがいかつぺかな」

「やだ、変な茨城弁。静男さんのお国はどこなの」

「ま、ま、堅いことは言わず。もう一杯、どう？」

「あら、わたしを酔わしてどうする気かしら」

「なんでも、何でもなかとよ」

「ウソ、男の人は単純だから、考えていることはすぐわかるわ」

「俺が考えていること、本当に分かる？」

「そうね、静男さんはわたしが好き。でしょ」

「それはないね。大人をからかつてはいけません」

「あら、わたしも大人でございます。赤ちゃんを産むことだって、できますわ」

静男は困って、おどけたタコ踊りで春代を笑わせた。

「なに？ それ」

「タコです」

「うふ、馬鹿ね。面白くないわ」

おはるちゃん4

庭に目を移すと、いつの間にか雨がしょぼしょぼと降り始めている。

残った酒を飲み干すと、静男は酒臭いため息をついた。

「うお座は、アンドロメダ座と、くじら座の間に横たわる大きな星座です。でも、残念なことに、明るい星がありません」

春代の黒目は、一回り大きくなる。「どのような形か、知っていますか」、と星座を語る彼女の瞳は、生き生きとして輝くのであった。

「うお座の形かい。さ、イメージとしては、魚だね」

「そう、魚ですよ。二匹の魚が、りぼんで繋がれているのです」

静男はさびしがり屋である。

人間関係は煩わしいと思うが、一人では、萎^なえてしまう。

魚が二匹いるということは、訳もなくうれしかった。

「二匹の魚は美の女神『アフロディテ』と、愛の神『エロス』です」

「ギリシャ神話かな？ エロスって聞いたことあるけど。アフロディテって？」

「美の女神でしょ、ヴィーナスのことですよ。エロスはアフロディテの息子です」

「あっそう。知らなかったな。で、ナンデ二人は魚になったの」「怪物に追われて、魚に変身して逃げたのです。離ればなれにならないように、二人はお互いの体をリボンで結んだの」

それからナイル川に飛び込んで逃げたのだと、春代はこたつから出ると、得意げに両手を水平に広げ、静男の前でひと回りした。

スカートが、から傘のように回り開いた。

「こんなふうにナイル川に飛び込んだの」

春代の肉体は成熟していた。

ふくよかな胸に ヴィーナスかと、静男はひとり、眩^{くら}いた。

「うお座生まれの人は『精神的な愛と、肉体的な愛』の両方を兼ね備えているの。愛を惜しみなく与えることと、愛を限りなく奪うことを、同時にできる人なのね」

「二重人格、いや、ちよつと違うな。よりアフロディテに傾けば、与える愛・エロスに傾けば、奪う愛ということか」

「その不安定さが魅力なの。うお座の守護星は、海の神『海王星』よ。大海原のような包容力があるの」

「母なる海だね。俺、海つて、大好きさ」

「星座が与えた『愛の二重性』と、守護星が授けた『包容力』で、この星座生まれの人は、神秘的な直観力を持った、ロマンティストなのです」

「えー、この俺が？ 信じられない」

静男さんは尽くすことに歓びを感じる、うお座の男なのね。女にとつては、危険な誘惑者かしら、と春代は笑った。

おはるちゃん5

ひとしきり降って上がった雨が、又強く降ってきた。

静男は深く酔っていた。

トイレに立とうとした静男が少しよろめくと、春代は「あ、あぶない」と、素早く静男の脇に肩を入れた。春代の甘い香りが、麻醉薬のように静男の脳をしびれさせる。

静男は春代を抱きしめなくなる衝動に駆られたが、理性がかろうじてそれを押し止めた。

「トイレまで行く？」

「いや、いい。自分で行く」

静男は己の心を見透かされることを恐れ、意地になってひとりでトイレに行った。

静けさの中で、窓をたたく強い雨音に、静男の記憶が蘇ってくる。あの日も、こんな雨だったな

秋子と結婚を話し合ったその日も、雨であった。

秋子は窓の外を眺めながら、春代との秘密を打ち明けた。

「お春は双生児でした。ふたりとも、幼い時、生きるか死ぬかの大病を患ったのです。そして……」

奇跡的にお春は生き残った、と秋子は話を続けた。

「そんな彼女が不憫で、私はお春を守ってあげました。

お春は私になついて、いつも私の後を付いてきました。私を頼りにしていたのですね。

ところが、いつの頃からか、お春は私のものを欲しがるようになり、終いには、全部取らないと気が済まなくなったのです。

それから私は、お春と距離を置くようになり、今では冷たい姉になっ
てしまいました」

たった二人きりの姉妹なのに、因果な話ですね、と秋子はため息を吐いたのであった。

おはるちゃん6

静男は台所に立つ春代を見つめていた。

台所からは、まな板をたく小気味よい音が聞こえてくる。春代には確かに我が強く、独占欲のようなものがある。しかしそれは、よほど注意深く観察しなければ気付かないほどのものである。と、静男は感じていた。

「ウフ、なにしているの？ わたしの顔に何か付いている？」

春代はたくあんを小皿に盛って、こたつに入った。

「姉妹か」

「え、なに？」

「いや、独り言さ。お春ちゃんは美人だね」

「バカ、おかしなひとね」

静男は盃を傾けた。冷めた酒がゆるやかに喉を刺激する。

春代の言動は普通の人と変わらない。むしろ天の衣をまとい、松林を舞い踊るような優雅な立ち振舞いなどは、とても常人の及ぶところではない。

降る雨音が生活の雑音を消し去り、部屋には奇妙な静寂が漂っている。ここには、二人がじゃれ合う、他愛もない会話しか聞こえてこない。二人は酒を呑み、静男は深く酔ったと感じた。

「わたしは静男さんが好き。お義兄さんはわたしのもの」

祈祷師が呪文を唱えるように小さくつぶやき、盃に酒を満たす春代。

静男はグイと呑んだ。冷めた辛口の酒が、たやすく喉を通り胃に染み込む。酒の注ぎ方が変化したことに、静男は気が付かなかった。電話のベルが鳴っている、静男には夢の中の出来事のように思えた。

「電話よ、出てもいい？」

「ああ、お願い」

こたつから立とうとしたその時、春代のスカートが乱れた。あらわになった太股が薄暗闇の中で、青白く妖しく光る。

静男はその美しさに言葉を失った。

露出した脚を隠すでもなく、春代は無表情に静男の顔色をうかがう。注意深くはあるが、大胆に躰をよじった。まるで、静男という男がどのように反応するか、試すかのようであった。

「はい、上柳です」

しばらくして、春代は急かされるようにして、受話器を上げた。

「まあ、お春なの。あなた、なんでそこにいるの」

「あの。そうだ、お義兄さんにお昼のおかずを届けに来たの」

「なんでもいいわ、用が済んだらすぐに帰りなさい。なにをやっているの、いったい」

「・・・」

「静男さんはいるのでしょうか。だして、早く」

「ハイ」

秋子の声は明らかに不機嫌である。春代は青ざめた表情で、「お義兄さん電話よ、おねえちゃんから」と、受話器を差し出した。

「いま、なにしているの」

静男は後ろめたく、惨めな言い訳をした。春代はこたつの上のミカンを突いているが、その表情は硬い。

「そんなこと、どうでもいいわ。山芋をもらったの、今夜はとろろでいいかしら。あ、ちょっと。それから、帰りは少し遅くなりますから、よろしくね」

静男は「わかった、気を付けてね」と、ありきたりの返事をして、電話を置いた。

「おねえちゃん、怒っていた？」

「いや、いつもあんな風だよ。気にしなくてもいい」

静男は小さくため息を吐くと、こたつに戻った。

小さな声ではあったが「痛い」と、春代が悲鳴を上げた。こたつに入るとき、静男が春代の足を蹴ってしまったのだ。

「あ、ごめん。痛かった？」

静男は慌ててこたつの中に手をいれる。春代の太股が、意外と近くにあった。

静男の手が、春代の太股のつけ根付近に触れる。

「ダメ」

春代は両手で力いっぱい、静男の手を上から押さえつけた。そこでふたりの動きが止まった。

春代の手が汗ばむ。静男が男の本性をむき出しにしようとしたその瞬間、春代は静男の手を払い、逃げた。

静男は部屋の隅に春代を追いつめた。春代は抵抗し、荒い息の下で意外なことを言った。

「ちよつとまって。お義兄さんはサチ子^{ひと}って女、知っている？」

静男は、エツと絶句して、硬直した。その隙に、春代は玄関先に逃れた。静男は慌てて後を追った。

裸足で外に飛び出すと、春代はおもてに佇^{たたず}んでいた。

「お、おはるちゃん」

荒れた息を整えるように、肩で息をしながら春代は言った。

「いいこと教えてあげる。サチ子さんは、うお座の女よ」

ゆっくり振り向くと、春代は表通りへと歩き出した。そして、彼女の後姿は、夕闇が迫る雑踏の中に消えた。

強い雨はいつの間にか上がり、あたりは冷たい霧雨になっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5035s/>

サチ子の日記

2011年4月28日22時11分発行